

一

次の文章を読んで、後の問に答えよ。

この部分につきましては、  
著作権の都合により公開いたしません。

この部分につきましては、  
著作権の都合により公開いたしません。

この部分につきましては、  
著作権の都合により公開いたしません。

この部分につきましては、  
著作権の都合により公開いたしません。

【注】

- コレクティブ——アーティストらによって形成された集団。
- キンバリー・クレンショー——アメリカの法学者、弁護士。

(伊藤亜紗「豊かな弱さのために」による)

問一 a h のカタカナは漢字に、漢字は読みをカタカナに、それぞれ改めよ。

問二 傍線部①「なぜ吃音は時間を作ることができるのか」について、筆者はいったん答えを述べた上で、傍線部②「もっと複雑な意味を持っている」と続けている。このことについて、次の(1)(2)の問いに答えよ。

(1) 筆者が傍線部②以前でいったん提示した答えとして、本文の内容と合致しないものを次のア～オから一つ選び、記号で答えよ。

ア 一語一語を丁寧に聞くような「待つ」モードが出現するから

イ それまでに進んでいた道がなくなり、立ち止まる時間が生まれるから

ウ 私たちの先へと進もうとする忙しい日常の時間が一時停止するから

エ 専門家には非流暢性として解釈されたものを停止と捉えなおすから

オ 自覚せず流れていた会話が止まったりゆっくりになったりするから

(2) 傍線部②とあるが、エリスにとって「吃音」とはどのようなものだと筆者は考えているか。端的に述べている一文を40字で抜き出し、その最初と最後の5文字を書き抜け。(句読点・かつこ類も字数に含める)

問三 傍線部③「障害が、ひとつの問いとして立ち上がってくる」と著者は言うが、それはどういうことか。本文の内容を踏まえ、吃音を例に「交差性」の語を用いながら100字程度で答えよ。(句読点・かつこ類も字数に含める)

問四 傍線部④「障害を」謎」ととらえるような弱さはそこにはない」とあるが、これとほぼ同じ趣旨となる一文の最初と最後の5文字を書き抜け。(句読点・かっこ類も字数に含める)

問五 傍線部⑤「いわば、彼らは強すぎた(…)メディアでしかなくなっていった」という筆者の主張ともっとも一致するものを次のア～オから一つ選び、記号で答えよ。

ア 彼らの身体には障害があつたが、背骨が曲がっていたり、片足がなかったりする身体をメディアとして公衆のもとに提示し活動を行う際に、それがかえって頑健さを持つものとみられてしまい、賛同を獲得しにくかった。

イ 彼らの身体には障害があつたが、社会の物理的環境を改善すれば、その能力も十分活かせるはずである。そのため、彼らは身体の意味を考える地点に立ち止まることなく、そのまま自らの姿をメディアと社会にさらし続けた。

ウ 彼らの身体には障害があつたが、一方でその障害を社会にさらして活動する強さがあつた。だがその強さのあまりに、自身の障害が有していた意味を掘り下げず、身体はメッセージを伝える媒体であるにとどまった。

エ 彼らの身体には障害があつたが、その障害のモデルをまず公衆に広く認識してもらうことが必要であるため、彼らは身体のある種のメッセージを書き込んだメディアとして人びとに呈し、社会の変革を訴え続けた。

オ 彼らは身体的には障害があつたが、当事者として障害のあり方を十分に理解していないことを認めてしまうと、社会に訴える力も弱まるため、彼らは精神的な細やかさのもたらす落とし穴に陥らないように心がけた。

問六 傍線部⑥「貧しい弱さ」(1)と傍線部⑦「豊かな弱さ」(2)とは、どのようなものか。それぞれ六〇字程度でまとめよ。  
(句読点・かっこ類も字数に含める)

問七 本文全体を3つの意味段落に分けたとき、第二段落と第三段落はどこから始まるか。冒頭の5文字をそれぞれ答えよ。  
(句読点・かっこ類も字数に含める)

## 二

次の文章は、『源氏物語』葵卷の一節である。光源氏と妻あおいのうえの葵上の夫婦仲は必ずしもむつまじいものではなかったが、葵上はようやく懐妊、もののけに苦しめられつつも、男児（夕霧）を出産した。喜びも束の間、葵上の体調は急変、死去してしまふ。亡骸は、鳥辺野とりべので火葬された。これを読んで、後の間に答えよ。

こなたかなたの御送りの人ども、寺々の念仏僧など、そこら広き野に所もなし。院をばさらにも申さず、後の宮、春宮などの御使、さらぬ所々のも参りちがひて、飽かずいみじき御とぶらひを聞こえたまふ。大臣はえ立ち上がりたまはず、「かかるよほひ齡の末に、若く盛りの子に後れたてまつりて、もごよふこと」と恥ぢ泣きたまふを、こころの人、悲しう見たてまつる。(ア)夜もすがらいみじうののしりつる儀式なれど、いともはかなき御骸骨かばねばかりを御なごりにて、暁深く帰りたまふ。常のことなれど、人一人か、あまたしも見たまはぬことなればにや、たぐひなく思し焦がれたり。八月二十余日の有明なれば、空のけしきもあはれ少なからぬに、大臣の闇に暮れまどひたまへるさまを見たまふも、ことわりにいみじければ、空のみながめられたまひて、(A)のぼりぬる煙けぶりはそれとわかねどもなべて雲居くもいのあはれなるかな

殿におはし着きて、つゆまどろまれたまはず、年ごろの御ありさまを思し出でつつ、などて、つひにはおのづから見直したまひてむ、とのどかに思ひて、なほざりのすさびにつけても、つらしとおほえられたてまつりけむ、世を経て、うとく恥づかしきものに思ひて過ぎ果てたまひぬる、など、悔しきこと多く思し続けらるれど、かひなし。鈍にほめる御衣たてまつれるも、夢の心地して、われ先立たましかば、深くぞ染めたまはまし、と思すさへ、

(B)限りあれば薄墨衣うすすみころも浅あけれど涙ぞ袖をふちとなしける  
とて念誦ねんずしたまへるさま、いとどなまめかしさまさりて、経忍びやかに読みたまひつつ、「法界ほふかいざんまい三昧普賢みくけんたいじ大士」とうちのためへる、行ひ馴れたる法師よりはけなり。若君を見たてまつりたまふにも、「何にしのぶの」といどど露けけれど、(イ)かかる形見さへなからましかば、と思し慰む。宮は沈み入りて、そのままに起き上がりたまはず、危ふげに見えたまふを、また思し騒ぎて、御祈りなどせさせたまふ。

はかなう過ぎゆけば、御わざのいそぎなどせさせたまふも、思しかげざりしことなれば、尽きせずいみじうなむ(ウ)。なのめに  
かたほなるをだに、人の親はいかが思ふめる、ましてことわりなり。また、たぐひおはせぬをだに、さうざうしく思しつるに、  
袖の上の玉の砕けたりけむよりもあさましげなり。

【注】

○院——桐壺院。光源氏の父。

○大臣——左大臣。葵上の父。

○もごよふ——足が立たず、這いまわる。

○あまたしも見たまはぬことなればにや——あまり多くの人の死を御覧になつていないからであろうか。

○闇に暮れまどひたまへる——「人の親の心は闇にあらねども子を思ふ道にまどひぬるかな」(後撰集・雜一・藤原兼輔)による。

○空のみながめられたまひて——「大空は恋しき人の形見かは物思ふことにながめらるらむ」(古今集・恋四・酒井人真)による。 ○殿——左大臣邸。

○限り——定め。配偶者が亡くなると、妻は濃い鈍色(にび)の喪服を一年間、夫は薄い喪服を三か月間着る、という決まりがあった。 ○法界三昧普賢大士——普賢大士(普賢菩薩)を讃える言葉。 ○けなり——一段とすぐれている。

○若君——光源氏と葵上の子、夕霧。

○何にしのぶの——「結びおきしかたみのこだになかりせば何にしのぶの草を摘ままし」(後撰集・雜二・兼忠が母の乳母)による。「かたみ」に「筐」形見、「こ」に「籠」子こをかける。

○宮——大宮。左大臣の妻、葵上の母。左大臣との間には、他に男子が一人(三位中将)ある。

○御わざ——七日七日の法事。

問一 波線部「おぼえられたてまつりけむ」を品詞分解し、文法的に説明せよ。

問二 傍線部(ア)～(ウ)を、適宜言葉を補って、わかりやすく現代語訳せよ。

問三 和歌(A)「のほりぬるゝあはれなるかな」を、適宜言葉を補って、わかりやすく現代語訳せよ。

問四 次の和歌(B)の現代語訳の空欄①および②に入るべき語句を、それぞれ漢字一文字で記せ。

亡き妻の喪に服すには決まりがあるので、私は色の浅い薄墨衣を着ているが、あふれる悲しみの涙は袖を深い  
にし、また、深い ② にしていることだ。 ① 色

三

次の文章を読んで、後の問に答えよ。ただし設問との関係で送り仮名を省いた部分がある。

梁孝元前在<sup>ニ</sup>荆州<sup>ニ</sup>、有<sup>リ</sup>丁覘<sup>者</sup>。洪亭民<sup>耳</sup>。頗善<sup>ク</sup>属<sup>レ</sup>文<sup>ヲ</sup>、殊<sup>ニ</sup>工<sup>ニ</sup>

草隸<sup>ニ</sup>。孝元書記、一皆使<sup>レ</sup>之<sup>ヲ</sup>、軍府輕<sup>シ</sup>賤<sup>ナル</sup>、多<sup>ク</sup>未<sup>ダ</sup>之<sup>ヲ</sup>重<sup>シ</sup>。恥<sup>レ</sup>令<sup>三</sup>子弟

以為<sup>ニ</sup>楷法<sup>ニ</sup>。時云<sup>ニ</sup>、丁君十紙、不<sup>レ</sup>敵<sup>ニ</sup>王褒数字<sup>ニ</sup>。吾雅<sup>ニ</sup>愛<sup>ニ</sup>其手跡<sup>ヲ</sup>、

常所<sup>ニ</sup>宝持<sup>スル</sup>。孝元嘗遣<sup>テ</sup>典籤<sup>ニ</sup>惠編<sup>ヲ</sup>送<sup>リ</sup>文章<sup>ヲ</sup>示<sup>シ</sup>蕭祭酒<sup>ニ</sup>。祭酒問云<sup>ニ</sup>、

君王<sup>ニ</sup>比賜<sup>フ</sup>書翰<sup>ヲ</sup>。及<sup>ニ</sup>写<sup>レ</sup>詩筆<sup>ヲ</sup>、殊為<sup>ニ</sup>佳手<sup>ニ</sup>。姓名為<sup>レ</sup>誰<sup>ト</sup>。那得<sup>ニ</sup>都無<sup>ニ</sup>

声問<sup>ニ</sup>。編以<sup>テ</sup>実答<sup>フ</sup>。子雲歎曰<sup>ク</sup>、此人、後生無<sup>レ</sup>比<sup>ニ</sup>。遂不<sup>レ</sup>為<sup>ニ</sup>世所<sup>レ</sup>称<sup>ル</sup>、

亦是奇事<sup>ニ</sup>。於是聞者少<sup>シク</sup>復刮目<sup>ス</sup>。稍仕<sup>ニ</sup>至尚書儀曹郎<sup>ニ</sup>、末為<sup>ニ</sup>晋

安王侍讀<sup>ト</sup>。随<sup>ヒテ</sup>王東下<sup>ス</sup>。及<sup>ニ</sup>西台陷歿<sup>スル</sup>、簡牘湮散<sup>シ</sup>、丁亦尋<sup>ニ</sup>卒<sup>ニ</sup>於揚

州<sup>ニ</sup>。前所<sup>ニ</sup>輕<sup>ニスル</sup>者、後思<sup>フ</sup>一紙<sup>ヲ</sup>、不<sup>レ</sup>可<sup>レ</sup>得<sup>ル</sup>矣<sup>ニ</sup>。

語釈

- 孝元——梁の元帝。
- 荊州——地名。
- 丁覬——人名。
- 洪亭——地名。
- 草隸——書体の名。草書と隸書。
- 軍府——軍の役所。
- 楷法——習字の手本。
- 王褒——人名。書の名手との評判があった。
- 吾——この文章の著者である顔之推。
- 典籤——官職名。
- 惠編——人名。
- 蕭祭酒——蕭は姓。名は子雲。祭酒は官職名。文部行政の長官に相当する。
- 声問——名聲。
- 尚書儀曹郎——官職名。
- 晋安王——梁の簡文帝。
- 侍読——官職名。
- 西台——元帝が天正元年(五五二)に立てた政權。承聖三年(五五四)、西魏によって滅ぼされた。
- 簡牘——竹簡・木簡や木牘。転じて書写材料全般。
- 湮散——埋もれ散らばる。失われてしまうこと。
- 揚州——地名。

(顔之推「顔氏家訓」による)

問一 波線部 a「耳」、b「頰」、c「殊」の読みを、それぞれひらがなで記せ。

問二 傍線部 1「恥<sub>レ</sub>令<sub>三</sub>子弟以為<sub>二</sub>楷法」を、書き下し文にせよ。

問三 傍線部 2「丁君十紙、不<sub>レ</sub>敵<sub>二</sub>王褒數字」を、現代語訳せよ。

問四 傍線部 3「遂不<sub>レ</sub>為<sub>二</sub>世所<sub>レ</sub>稱、亦是奇事」を、書き下し文にせよ。

問五 傍線部 4「前所<sub>レ</sub>輕者、後思<sub>二</sub>一紙、不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>得矣」を、現代語訳せよ。

問六 この文章の内容を、一五〇字以内で要約せよ(句読点も字数に含める)。